

ナチス時代のジプシー研究

一人種優生学研究所における迫害のための調査をもとに—

外国語学部 国際文化交流学科 4年

金崎 玲

序章

ユダヤ人がホロコーストの対象者であったことは一般常識であるが、その他にも犠牲者が存在したことをどれくらいの日本人が知っているだろうか。ナチス期のドイツではユダヤ人だけではなくジプシー¹や障がい者、同性愛者なども迫害の対象となっていたのである。そもそも、ジプシーという単語を聞いたことがあっても、ジプシーがどういった人々のかを知っている人は日本では少数派ではないだろうか。筆者は、ディズニーアニメーションの『ノートルダムの鐘』を観てジプシーという存在を知って興味をもち、ゼミナールの研究テーマに選んだ。

そもそもジプシーとは、インド北西部のパンシャブ地方を故郷とする民族で、ペルシア、アルメニア、シリア、ギリシャ、バルカン半島を経由して15世紀頃ヨーロッパに到達する。ヨーロッパでも彼らは放浪を続けたことから、定住を当たり前とするヨーロッパの人々からは疎まれる存在であった。到達した当初、歓迎された時期もあったが、16世紀からはジプシーを迫害する政策が各国で実施される。それはドイツも例外ではなかったが、ナチス時代のジプシーの処遇は他国とは異なっていた。今年で解放から70年が経った、アウシュヴィッツ・ビルケナウなどの強制収容所に多くのジプシーは送られたのだが、この送還のためにナチスはまずドイツに居住する対象者を調査せねばならなかった。これまでジプシーについて研究してきた筆者は、この時代ジプシー研究の中心地であった人種優生学・人口生物学研究所（以下、人種優生学研究所と略称）²を今回取り上げる。この研究所での調査をみていくことで、当時のナチスによるジプシー迫害の根拠がどのようなものであったかを探っていきたい。

第1章 人種優生学研究所の設立過程

1. 人種優生学

まずは研究所の名称となっている「人種優生学」から触れたい。ホロコーストといったユダヤ人やジプシーなどの民族排外は、人種優生学の発展が背景にあるといえる。人種優生学³という言葉は、1833年にイギリスの科学者フランシス・ゴールトン（Francis Galton, 1822-1911）が、「生まれながら優れている」あるいは「遺伝における優秀性」を意味したギリシャ語（ευγενεσία）から造語したものである。ゴールトンがこの言葉に込めた意味は、血統が優れている、より生存に値する人種に対し、速やかに繁殖する機会を与えることによって人類を改造する科学を作り出すことであった。⁴彼は、文化的・社会的業績を残し、「生産的」である人種の血を優生、社会に貢献する能力がなかったり反社会的な行動をする人種は人類に現れた「退化」であるとし劣等とみなしたのである。⁵

19世紀後半に入ると、ナチスの人種優生学により決定的な影響を及ぼした学者たちが現れる。フランスの伯爵ジョゼフ・アルテュール・ド・ゴビノー（Joseph Arthur Comte de Gobineau, 1816-1882）は、白色人種の優越性と混血による没落を唱え、人類の歴史上アーリア人のみが文化の創造に寄与したと主張した。20世紀初頭にはアドルフ・ヨーゼフ・ランツ（Adolf Josef Lanz, 1873-1954）が、君主人種（Master race [英]、Herrenrasse [独]）⁶の概念を生み出し、「ブロンドで碧眼のアーリア人」がそれに該当するとした。⁷そして1907年に国際人種衛生学協会が設立され、1911年にはドレスデンで開かれた国際衛生展示会と合わせて国際人種衛生学協会が会議を主催した。この会議には、ドイツ、オランダ、チェコスロvakia、オーストリア、スウェーデン、

デンマーク、そしてアメリカ合衆国という多数の国の学者たちが参加した。翌年の1912年には、ヨーロッパとアメリカから300人以上の学者がロンドンに集まり、第一回国際優生学学会が以前の会議より規模を拡大し開催された。⁸そして1921年、1932年にはニューヨークにて第二回と第三回の学会が開かれた。ヨーロッパ諸国から学者が参加し、他国で学会も主催されていたが、国際人種衛生学協会の実情はドイツの学者が牛耳っているというものであった。

2. 警察と人種優生学研究所

それでは人種優生学の発展していたドイツにおいて、どのように研究所は設立し、ジプシー研究は発展していったのか。ドイツにおけるジプシー研究の発端を作ったのは、犯罪捜査官のアルフレート・ディルマンであるといわれている。⁹1899年、彼はミュンヘンで初めてジプシーに関する捜査部局を設立し、1938年にこの部局は「ジプシー犯罪除去のための帝国刑事警察本部」として、ハインリヒ・ルイ・ポルト・ヒムラー (Heinrich Luitpold Himmler, 1900-1945) によってベルリンの帝国刑事警察本部に編入される。全ての刑事警察官庁は「ジプシー問題の部署」を設置することになり、数人の係官にジプシー問題のための権限を与えられた。¹⁰以降、ジプシー研究は刑事警察の範疇に属するものとなる。

ディルマンの調査局は、当時ジプシー研究の専門家であったジーゲムント・ウォルフに研究を依頼した。彼は膨大な資料を作成したのだが、これに目を付けたのが、内務省の系譜学の専門家であったアヒム・ゲルヒであった。彼はウォルフが作成した資料の売却を迫ったが、ウォルフはこれを拒んだため、遂にはゲシュタポによって家宅捜査が行われ、資料は全部押収されてしまう。その際、ウォルフは抵抗すれば強制収容所行きだと脅迫され、また、自分の次にこの膨大な資料を利用するにはロベルト・リッター (Robert Ritter, 1901-1951) という名の研究者だと知らされたようである。1900年代に入ると、多くの人種優生学研究者がジプシーの研究に携わるようになり、特にヒトラーが政権の座に就いてからその数は増したのだが、¹¹その中でもジプシー研究の権威となったのがこのリッターという男である。

1932年からチュービンゲン大学の付属施設である青少年診療ホームに精神科医として勤めていたリッターは、1934年からドイツ人種優生学協会 (Deutsche Gesellschaft Rassenhygiene) の婚姻相談室主任になり、補佐医に昇格する。¹²上司のロベルト・ガウプ博士 (Robert Gaupp, 1879-1953) が行っていた「反社会的人間」の系譜の研究に影響され、1935年「ジプシー混血児の遺伝学的研究」を開始した。¹³同じ年にベルリンにて開催された住民問題の国際会議において、リッターは混血ジプシーを「反社会的精神病質者」と称し、初めてジプシーの民族抹消を先取りした構想を演説する。¹⁴翌年の1月、彼は優生学裁判所¹⁵の構成員になり、11月には帝国公衆衛生局付属の人種優生学研究所が設立され、リッターは所長としてここに就任した。¹⁶彼は帝国 - プロイセン内務省の犯罪予防のためという名目の委託を受けて、ドイツ在住の非定住住民の調査とリストアップを行うことになる。1942年、帝国刑事警察局内の犯罪生物学研究所の所長になり、1943年には帝国公衆衛生局の部局長に任命され、医長に昇格した。ついには、内務省から犯罪記録簿などの資料を欲しいだけ要請できるほど、彼の地位は確固たるものになった。つまり、リッターは人種優生学的活動の領域のなかで政治的特権を自由に行使できたのである。

彼は、遺伝が原因となってジプシーは「反社会的」なのだと考えた。また、「反社会的」「精神薄弱」そして「犯罪性」といった特性は、ジプシーと他の「漂泊民」¹⁷の間にできた混血者のみがもっているものというものが、リッターの学問的イデオロギーの中心であった。彼が所長を務めた人種優生学研究所では、彼の指導の下、特に犯罪生物学遺伝研究や反社会的人間、また人種の異なる住民集団について研究が行われた。リッターは他の研究者に突き付けられた緊急の課題は、非定住のジプシーの遺伝研究であった。この研究所の目的は、全ての純血ジプシーと混血ジプシーを分類・リストアップし、国家社会主義ドイツ労働者党や刑事警察、軍隊といったナチス国家の部局が、ドイツに居住するジプシーと接触・強制連行できるようにすることであった。¹⁸

第2章 ジプシー調査

1. ジプシー情報の収集

次に、人種優生学研究の学者たちが、どのようにしてジプシーの情報を集め、それをもとに分類していくのかをみていく。彼らの研究に大きく貢献したのが教会である。ドイツの教会の中でも、特にプロテスタント教会はナチスの政策に従ってジプシーの排斥を行っていた。1933年になると、それは極めて顕著に現れた。ザクセン・プロテスタント＝ルター教会州聖務院は、民族とは血族共同体かつ同属共同体であるがゆえに民族教会は人種と血族を求めるものとして、全ての異人種を教会から締め出すことを決めた。

さらに、1934年2月13日にバイエルン・プロテスタント地区教会の指導部は、人種学研究に関する全ての教会の書籍の検証を行う旨の告知を出した。¹⁹ このように教会側は、犯罪警察の「ジプシー問題課」や警察の鑑識課、人種優生学生物学者、優生裁判所などにジプシーに関する情報提供などの協力を行った。もし、牧師たちの情報提供がなければ、十分なジプシーについてのリストアップはできなかつたと考えられる。

そして1938年5月19日に、結婚しようとする者は自分の祖父母の種族所属に関して知るところを申請しなければならないという新戸籍制度のための最初の命令が下される。こうすることで、未だ発見されないジプシーの把握が推し進められた。²⁰

リッターがジプシー研究を始めた当時、ミュンヘンにすでに1万9000人ほどの個人調書があったが、そのなかにはジプシーではない人もおり、すでにドイツから去った者もいた。²¹ リッターはジプシーとつながる人々の分類に精を出し、調査団をジプシー集落に派遣したり、強制収容所にまで出掛けて個体調査を行った。²² 残りの家族構成員をリストアップするため、リッターの協力者による威嚇などもあり、情報を洩らさない場合は断種・強制収容所送りにされた。²³ ジプシーであることを否定する人たちも多く、それを証明するために所属宗教を証明する両親の洗礼記録などの文書を提示したり、ナチス党に入党したりもした。しかし、リッターは系譜の助けを借りて、1941年2月までに約2万名を純血ジプシー

と混血ジプシーに分類し、1942年には約3万人のジプシーの調査を終了させたといわれている。これはドイツに住むジプシーのほぼ全人口に相当する数字であった。

2. 種族標徴

人種優生学研究所はジプシーを探し出そうとしたが、それだけが彼らの目的ではなく、さらにそのジプシーたちを「純血」と「混血」という大きく分けて2つのグループに区分することを任務としていた。19世紀以降、ジプシー学者は、ジプシーの中には他のヨーロッパ人などの非ジプシーとは絶対に結婚しない、少数派の純粋なジプシーがいると主張した。しかしこのジプシー学者による分類は、学者に協力したジプシーを純血と判断したもので、系譜などを使用した研究に基づくものだけではなかったようである。ジプシー学者を避けたり不愉快にした、研究に協力的なジプシーは拒絶され、ディディコス (Didikois) などと軽蔑的な名で呼ばれた。ディディコスは1870年代、スマート (B. C. Smart) とクロフトン (Henry Thomas Crofton)²⁵ が始めて記録した。彼らによれば、ディディコスとはロマニ語を間違える混血ジプシーから成るとされている。当時のジプシー学者は、最も古いロマニ語²⁶ を知っていることと種族的純血を結びつけていたのである。²⁷

それではナチス期には、何をもって純血と混血を判断していたのだろうか。人種優生学研究所においては、「種族標徴」と「人種標徴」の大きく分けて2種類の方法に基づいて鑑定するよう指示があった。²⁸ まずは種族標徴をみていく。この方法ではジプシーを6つにグルーピングする。15世紀という早い段階からドイツ語圏に定住していたジプシーであるシンティ、1870年頃にハンガリーからやってきたジプシーの子孫であるロマ、ルーマニア系ジプシー移民の子孫であり例えばカルデラシュなどのロマの一種であるゲルデラリー、セルビアから移り住んだジプシーの子孫でありロマの別の一種であるロヴァーリ、20世紀初頭にボヘミア、モラヴィア、スロヴァキア、旧オーストリア＝ハンガリーからやってきたジプシーの子孫であるラレーリー²⁹、熊使い出身バルカン系ジプシーのウルサリである。この種族標徴では、全体的印象と身体上の特徴、ジプ

シーや言語共同体への所属性、種類の揃に対する生まれてからの拘束性、「ジプシー的」生活様式、系譜図の5つの判断基準が深く関わってくるようである。³⁰しかし、後述するがジプシー集団は多々いるため、このように6つに正確に分類することなどは到底できず、こうした分類は極めてずさんであり、科学的なものではなかったといえる。³¹

ナチス期、この6つの中ではシンティとラレーリーが純血種と考えられ、初期インド・ゲルマン系の研究標本として生かされた。³²彼らは交婚の可能性が低いと考えられていたため、混血ジプシーは強制収容所送りにされたのに対し、彼らは限定ながら移動の自由が認められたりした。³³しかし、このように考えたのはリッターやヒムラーら一部の人間であり、それに対し周辺の多くの人々は反対したようである。³⁴リッターは純血ジプシーを居留地に「保護」すべきと考えたし、³⁵シンティやラレーリーを交婚の可能性が小さいとして「任意」の断種・不妊化を強要し、研究用標本のためにもある程度の移動の自由を認める布告を1942年12月に出したのはヒムラーであった。³⁶しかし、アドルフ・ヒトラー(Adolf Hitler, 1889-1945)はこれに賛同せず、純血ジプシーと同じアーリア人の標本として保存すべきだと主張したヒムラーと意見が対立したというエピソードも残っている。³⁷このようなヒムラーの考えには、他のナチス指導者も全く賛同せず、ジプシー保留地を設けるという考えも相手にされなかったようである。³⁸

3. 人種標徴

ここではもう一つの方法である人種標徴についてみていく。人種標徴では、三世代まで遡って血統を調査し、6つのグループを記号で表す。具体的にいうと、8人の曾祖父母のうち6人以上が純血ジプシーであった場合は純血ジプシー、8人の曾祖父母のうち1人から5人が純血ジプシーであった場合は混血ジプシーと判断された。

記号では、「Z」⁴⁰と「ZM+」⁴¹、「ZM」⁴²はさらに2つに分けられ「ZM I Grades (第一級混血ジプシー)」と「ZM II Grades (第二級混血ジプシー)」、そして「ZM-」、「NZ」と表記された。「Z」は純血ジプシー、「ZM+」はジプシーの血統がまさっている

混血ジプシーを指す。「ZM」はジプシーとドイツ人の血統が半々である混血ジプシーを指すのだが、その中でも両親の一方が純血ジプシーであり、他方はドイツ人である場合は「ZM I Grades」、両親の一方が「ZM I Grades」で、もう一方がドイツ人である場合は「ZM II Grades」と表された。「ZM-」はドイツ人の血統がまさっている混血ジプシーを指す。そして、「NZ」は非ジプシーの意味で、つまりドイツ人の血統を有する人間、あるいはそれとみなされる人間を意味した。⁴³このような分類は血統を基準に分類を行っていたが、種族標徴と同様にいい加減なものであったと考えられる。現存する記録文書において、大抵の場合は「優勢なジプシーの血統」といった表示やそれに類する表現が用いられているようである。⁴⁴

種族標徴と人種標徴はどちらとも曖昧なものではあったが、これらの分類方法をもとに出した調査結果が存在する。先述した通り、リッターは1942年に約3万人の調査を終えたとされているが、同じ年の11月に匿名の「ジプシー問題の歴史性」という報告が帝国刑事警察本部から出された。この報告では、帝国内に居住しているジプシーの数は28,627人であった。リッターの3万人と匿名報告の数では1,373人の違いがあるものの、この匿名の調査は、リッターの報告によるものだと言われている。⁴⁴3万人という数は事実なのか、それともリッターによる意図的な虚偽なのかはわからないが、この3万人の調査結果の詳細がわからない以上、今回は「ジプシーの歴史性」という匿名の調査を取り上げる。

この報告では、6ではなく8つのカテゴリーにジプシーが分類されている。純血ジプシー(Z)が1,097人、圧倒的にジプシーの血統の割合の高い混血ジプシー(ZM+)が6,992人、ジプシーの血統とドイツ人の血統が同じ割合の混血ジプシー(ZM)が2,967人、圧倒的にドイツ人の血統の割合の高いジプシー(ZM-)が2,392人、非ジプシー(NZ)が2,652人、ラレーリーが1,017人、ロマが1,585人、ウルサリが211人という結果であった。⁴⁵

このように、ジプシーを細かく分類することもあったが、何よりも大きな隔たりとなるのが、純血か混血かの違いであった。純血ジプシーに対する考え方方は先ほど触れたが、それでは混血についてはど

うであったのだろうか。ジプシー間には性病が蔓延しているため社会適合は不可能だと考えていた、キュッパースという学者の主張をここで紹介する。

もし彼らが非ジプシーの人間と婚姻関係を結ぶとすれば、最低のドイツ人としか結婚しないであろう。特別危険な源泉は、混血ジプシーである。彼らは、純粋なジプシーと主民族の構成員との婚姻、あるいは婚姻によらない結びつきから生まれる。この遺伝による重荷は、そのような結びつきが、専ら主民族の低級な一員との間で行われる時、一段と危険性を増す。その結果、反社会的人間、遺伝的に不適合な人間、犯罪者、売春婦などの数がきわめて高くなる。⁴⁶

混血を完全なる悪だと考えていた当時の学者の考えは、現代の我々にとっては簡単に理解できるものではない。しかし、上記の主張は、ジプシーとアーリア人の混血が当時どのように捉えられていたかを知る、一つの具体例として参考にできるだろう。人物像を読み取っていく。

終章

人種優生学者はヨーロッパ諸国に存在していたが、ヒトラーが政権を握ったことにより、ドイツでは研究所や研究者は政府からの支援を得ることができ、より発展を遂げた。ナチス期のジプシー研究の代表者であるリッターはジプシーを純血と混血を分類することを任務としていたが、2つの分類方法に基づいたものであっても、そのグルーピングは曖昧なものであった。しかし、当時の学者にとって混血はドイツを弱体化させる要因であり、分類し隔離、そして減ぼす必要があったため、人種優生学研究所での分類作業が求められた。

ナチス時代のジプシー集団の種類はリッターたちがグルーピングした以上に様々なものがあったが、現代においてその多様性はさらに増していると認識される。現代のジプシー集団としては、ドイツのシンティ (Sinti) やフランスのマヌーシュ (Manouche)、イギリスのロマニチャル (Romanichal)、スペインのヒターノ (Gitano)、フィンランドのカーロ (Kale)

たちや、錫掛け屋集団カルデラシュ、熊つかい集団ウルサリ、錫メッキ屋集団コストラリルなどが挙げられる。中にはロマニ語またはロマニ語起源の言葉を使わない集団もあり、彼らは長い歴史の過程で、あるいは奴隸制などによって、ロマニ語を忘れたり失ったと説明されることが多い。しかし、もともとロマニ語を使わず、ジプシーとは別種の人間集団とされる移動生活者集団が各国に存在する。例えば、アイルランドやスコットランドのティンカー、フランスやドイツ、スイスのイエニッシュ、スペインのキンキ、オランダのヴーゲンベヴォーナーなどである。彼らは場合によっては同じ移動生活者としてジプシーと一緒にされることもある。上記のグループ以外にもジプシー集団は多々存在している。ジプシーの分類は文献によっても異なり、各国の研究者、NGOなどの団体による調査によっても差異があるのだ。⁴⁷そのため、今日、ジプシーを定義するのはナチス期と同様に困難であろう。

完璧な分類が不可能であることは共通しているが、一方で現在とナチス期の大きな相違点はなんだろうか。それは、ジプシーの定義づけをどういった人物が行うかという点だろう。ナチス時代またはそれ以前、ジプシーは非ジプシーによって定義されたが、現代では自らを真のジプシーであると主張する集団が現れた。⁴⁸このように、非ジプシーから一方的に決めつけることができないため、今日のジプシーを判断する要素はナチス期よりも不明確になったであろう。しかし、移動生活者集団を時にジプシーとして括ること、種族標識での「ジプシー的」生活用様式という判断基準において漂泊といった行為を重視していたことから、現代とナチス期のどちらにおいても、「ジプシーをジプシーとする」最も影響力をもつ要素は「放浪」であると考えられるのではないか。

ナチス時代においてはジプシーと非ジプシーの違いとして外見なども挙げられるが、長い歴史の中で混血が進み、2つを隔てる要素としてはそこまで強くはなかっただろう。一方、放浪は「ジプシーの伝統的な」生活様式であると考えられており、そして非ジプシーにとってそれは何より「異質」で、そして「反社会的」とされた。ドイツ国民こそ至高ということを実証しなければならなかったナチス時代の

学者たちは、この「放浪」を強調し、ジプシーの劣等性を主張したのである。

脚注

- 1 現代において「ジプシー」は一般的に差別用語とされており、「ロマ」と言い換えるように推奨されている。しかし、一口に「ジプシー」といっても多数の民族がいるため、「ロマ」という呼称を嫌う人々もあり、一概に「ジプシー」を「ロマ」と変換することはできない。そのため、本稿ではわかりやすくするためにも、これらの迫害された人々のことを便宜的に「ジプシー」と表記する。
- 2 1941年に人種優生学・人口生物学研究所(Rassenhygienische und Bevölkerungsbiologische Forschungsstelle)から人種優生学・犯罪生物学研究所(Rassenhygienische und Kriminalbiologische Forschungsstelle)に改名。
- 3 基本的に日本語では Eugenics [英]、Eugenetik [独] を「人種優生学」や「優生学」と翻訳し、ほぼ同義語である Racial hygiene [英]、Rassenhygiene [独] は「人種衛生学」や「民族衛生学」と翻訳する。しかし、日本語文献によっては Rassenhygiene を「人種優生学」と訳すものもあるため、全て意味は同じものだと考えて差し支えない。河島幸夫「ナチズムにおける人間改良計画—『レーベンスボルン』(生命の泉)を中心に—」山崎喜代子編『生命の倫理2—優生学の時代を超えて』九州大学出版会、2008年、127頁。
- 4 ダニエル・J・ケヴルズ(西俣綱平訳)『優生学の名のもとに—「人類改良」の悪夢の百年』朝日新聞社、1993年、3頁。
- 5 マーク・B・アダムズ(佐藤雅彦訳)『比較「優生学」史一独・仏・伯・露における「良き血筋を作る術」の展開』現代書館、1998年、29頁。
- 6 北方人種を優勢とする考え方であり、ナチスの人種に対する思想とほぼ同じ。
- 7 金子マーティン『「ジプシー収容所」の記憶:ロマ民族とホロコースト』岩波書店、1998年、149頁。
- 8 シュテファン・キュール(麻生九美訳)『ナチ・コレクション アメリカの優生学とナチ優生思想』明石書店、1999年、38頁。
- 9 小川悟『ジプシー:シンティ・ロマの抑圧の軌跡』関西大学出版部、2001年、173頁。
- 10 ドナルド・ケンリック、グラタン・パックソン(小川悟訳)『ナチス時代の「ジプシー』』明石書店、1984年、112頁。
- 11 小川、前掲書、12頁。
- 12 金子、前掲書、154頁。
- 13 小川、前掲書、98頁。
- 14 同上書、99頁。
- 15 優生学裁判は裁判官、厚生技官たる医師、遺伝疾患に詳しい医師各1名から構成される。医師は、「ビスマルクとは誰か」「1.5ポンドのパンの値段は15ペニヒである、7ポンドではいくらか」といった問題を知能テストとして出題する。当時多くのジプシーが義務教育を受けておらず、回答を書くことができなかつたため、大抵の場合「生まれながらの精神弱弱者」で、遺伝疾患の保有者として強制断種の対象となつた。同上書、94頁。
- 16 金子、前掲書、247頁。
- 17 終章で登場する「移動生活者集団」のこと。リッターは、漂泊民はアーリア人ではなく、ドイツの先住人種の生き残りの子孫だと考えた。ドナルド、グラタン、前掲書、102頁。
- 18 小川、前掲書、123頁。
- 19 同上書、96頁。
- 20 同上書、128頁。
- 21 ドナルド、グラタン、前掲書、96頁。
- 22 関口義人『図説「ジプシー』』河出書房新社、2012年、43頁。
- 23 イアン・ハンコック(水谷駿訳)『ジプシー差別の歴史と構造—パーリー・シンドローム』彩流社、2005年、105頁。
- 24 小川、前掲書、177頁。ドナルド、グラタン、前掲書、97頁。
- 25 スマートとクロフトンは、1875年に最初の英語・ロマニ語辞典を編纂している。ジュディス・オーカリー(木内信敬訳)『旅するジプシーの人類学』晶文社、1987年。
- 26 ジプシーの言語であるが、放浪していたことから様々な言語の影響を受けている。
- 27 相沢好則『ロマ・旅する民族—ジプシーの人類学的考察の試み』八朔社、1996年、117頁。
- 28 リューディンガー・フォッセン(小川悟訳)『チゴイナー(3)絶滅』『関西大学人権問題研究室紀要』38号、1998年、84頁。
- 29 ラレーリーとはロマニ語で「口がきけない」人間、つまり別の方言を話す人間を意味する。
- 30 ドナルド、グラタン、前掲書、128頁。
- 31 関口、前掲書、43頁。
- 32 同上書、45頁。
- 33 同上書、127頁。アンガス・フレーザー(水谷駿訳)『ジプシー:民族の歴史と文化』平凡社、2002年、340頁。ケンリック、パックソン、前掲書、103頁。
- 34 実際に、リッターとヒムラーは親交があった。金子、前掲書、155頁。
- 35 同上書、154頁。
- 36 フレーザー、前掲書、340頁。
- 37 水谷駿『ジプシー:歴史・社会・文化』平凡社、2006年、134頁。
- 38 フレーザー、前掲書、342頁。
- 39 ハンコック、前掲書、125頁。
- 40 「Z」と「M」は混血ジプシーを意味する「Zigeuner」(Athinganos)を語源とする。
- 41 「Z」と「M」は混血ジプシーを意味する「Zigeuner」(Athinganos)を語源とする。川越修・矢野久(編者)『ナチズムのなかの20世紀』柏書房、2002年、232頁。
- 42 フォッセン、前掲論文、84頁。ドナルド、グラタン、前掲書、127頁。
- 43 同上書、127頁。
- 44 小川、前掲書、177頁。
- 45 同上書、178頁。
- 46 ドナルド、グラタン、前掲書、99頁。
- 47 関口、前掲書、45頁。
- 48 シンティやカルデラシュ、グラフ系ロマ(ルーマニアで奴隸制のもとにおかれてきた集団の一部)がこれにあたる。水谷、前掲書、39頁。

参考文献

- ※参考文献は規定枚数外である。
- ・相沢久『ジプシー:漂泊の魂』講談社、1における復習のテーマ』『人文研究』第40巻12号、1988年、971-984頁。
 - ・相沢好則『ロマ・旅する民族—ジプシーの人類学的考察の試み』八朔社、1996年。
 - ・アセオ、アンリエット(遠藤ゆかり訳)『ジプシーの謎』創元社、2002年。
 - ・アダムズ、マーク・B.(佐藤雅彦訳)『比較「優生学」史一独・仏・伯・露における「良き血筋を作る術」の展開』現代書館、1998年。
 - ・綾部恒雄『講座 世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在』ヨーロッパ』明石書店、2005年。
 - ・アリー・ゲット(芝健介訳)『ヒトラーの国民国家—強奪・人種戦争・国民的社会主義』岩波書店、2012年。
 - ・伊藤定良『ドイツの長い十九世紀』青木書店、2002年。
 - ・ヴリスロキ、フォン、ハインリヒ(浜本隆志訳)『ジプシーの伝説とメルヘン—放浪の旅と見果てぬ夢』明石社、2001年。
 - ・大里賢太『継承される差別—「ジプシー概念」とドイツにおける「ジプシー政策」をめぐって』『立命館言語文化研究』第12巻3号、2000年、113-127頁。
 - ・大谷実『19世紀末から20世紀初頭のドイツにおけるシンティ・ロマ概念の変遷—百科事典と内務省資料を手がかりに』『ゲシヒテ』第8号、2015年、3-22頁。
 - ・小川悟『ジプシー:シンティ・ロマの抑圧の軌跡』関西大学出版部、2001年。
 - ・オーコリー、ジュディス(木内信敬訳)『旅するジプシーの人類学』晶文社、1987年。
 - ・金子マーティン『「ジプシー収容所」の記憶:ロマ民族とホロコースト』岩波書店、1998年。
 - ・金子マーティン『世界人権問題叢書3 ナチス強制収容所とロマ生還者の体験記と証言』明石書店、1991年。
 - ・金子マーティン『ロマ民族のナチス被害に対する国家補償』『歴史学研究』630号、1992年、18-27頁。
 - ・川越修・矢野久(編者)『ナチズムのなかの20世紀』柏書房、2002年。
 - ・河島幸夫『ナチズムにおける人間改良計画—『レーベンスボルン』(生命の泉)を中心に—』山崎喜代子編『生命の倫理2—優生学の時代を超えて』九州大学出版会、125-156頁、2008年。

ナチス時代のジプシー研究

- ・木内信敬『ジプシーの謎を追って』筑摩書房、1996年。
- ・キュール、シュテファン（麻生九美訳）『ナチ・コレクション アメリカの優生学とナチ優生思想』明石書店、1999年。
- ・ケヴルズ、ダニエル・J.（西侯総平訳）『優生学の名のもとに「人類改良」の悪夢の百年』朝日新聞社、1993年。
- ・クラインシュミット、ハラルド（久保田英嗣訳）『ドイツのナショナリズム—統一のイデオロギーの基盤』彩流社、2001年。
- ・クローウェ、デーヴィッド（水谷驥訳）『ジプシーの歴史：東欧・ロシアのロマ民族』共同通信社、2001年。
- ・クーンズ、クローディア（滝川義人訳）『ナチと民族原理主義』青明社、2006年。
- ・ケンリック、ドナルド、パックソン、グラタン（小川悟監訳）『ナチス時代の「ジプシー』』明石書店、1984年。
- ・ゴルドハーゲン、ダニエル・ジョナ（望田幸男訳）『普通のドイツ人とホロコースト—ヒトラーの自発的死刑執行人たち』ミネルヴァ書房、2007年。
- ・ジーメンス、ウェルナー、H.（神波比良夫）『遺伝学説と優生学—並びに人口政策』内田老鶴園、1962年。
- ・シュタイン H.J 「ドイツにおけるシンティーとロマ（ジプシー）について』『大阪学院大学通信』第30巻6号、1999年、585-595項。
- ・関口義人『ジプシーを訪ねて』岩波新書、2011年。
- ・関口義人『図説 ジプシー』河出書房新社、2012年。
- ・谷喬夫『ヒムラーとヒトラー 氷のユートピア』講談社、2000年。
- ・千葉美千子「ホロコースト研究におけるロマ民族をめぐる考察」『北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集』第2巻、2006年、19-34頁。
- ・ドラリュ、ジャック（片岡啓治訳）『ゲシュタポ・狂気の歴史』サイマル出版会、1971年。
- ・浜本隆志「ジプシー」の伝承〈1〉“ジプシー”はどこから』『月刊言語』第30巻1号、2001年、8-11項。
- ・ハンコック、イアン（水谷驥訳）『ジプシー差別の歴史と構造—パリア・シンドローム』彩流社、2005年。
- ・ヒル、ミュラー（南光進一郎訳）『ホロコーストの科学 ナチの精神科医たち』岩波書店、1993年。
- ・フォッセン、リューディンガー（小川悟訳）「チゴイナー（2）—ロマ、シンティ、ヒターノス、ジプシー、迫害とロマンティシズムのはざまで—』『関西大学人権問題研究室紀要』34号、1996年、25-62頁。
- ・フォッセン、リューディンガー（小川悟訳）「チゴイナー（3）絶滅』『関西大学人権問題研究室紀要』38号、1998年、61-90頁。
- ・フレーザー、アンガス（水谷驥訳）『ジプシー：民族の歴史と文化』平凡社、2002年。
- ・ブロック、マルチン（相沢久訳）『ジプシーの魅力』養神書院、1966年。
- ・ブロック、ジュール（木内信敬訳）『ジプシー』白水社、1974年。
- ・ベンツ、ヴォルフガング（齊藤寿雄訳）『ナチス第三帝国を知るための101の質問』現代書館、2007年。
- ・ベンツ、ヴォルフガング（中村浩平、中村仁訳）『ホロコーストを学びたい人のために』柏書房、2004年。
- ・マクナブ、クリス（松尾恭子訳）『図表と地図で知る ヒトラー政権下のドイツ』原書房、2011年。
- ・マルティネス、二コル（水谷驥・左地亮子訳）『ジプシー [新版]』白水社、2007年。
- ・三島憲一『文化とレイシズム—統一ドイツの知的風土』岩波書店、1996年。
- ・水谷驥『ジプシー：歴史・社会・文化』平凡社、2006年。
- ・モムゼン・ハンス（関口宏道訳）『ヴァイマル共和国史 民主主義の崩壊とナチスの台頭』水声社、2001年。
- ・山口定『ナチ・エリート 第三帝国の権力的構造』中央公論社、1976年。
- ・米本昌平『遺伝管理社会—ナチスと近未来』弘文堂、1999年。
- ・ラーカー、ウォルター（井上茂子、木畑和子、芝健介、長田浩彰訳）『ホロコースト大事典』柏書房、2003年。
- ・ローゼ、ロマニ（金子マーティン訳）『ナチス体制下におけるシンティとロマの大量虐殺 アウシュビッツ国立博物館常設展示